様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４１３１

研究課題名（和文）現代アジア・オセアニア地域研究のための「南洋地理学」の批判的検討

研究課題名（英文）Critical study on "Nayo" geography for contemporary Asia and Oceania regional studies

研究代表者
岡本　耕平（Okamoto, Kohei）

名古屋大学・環境学研究科・教授

研究者番号：９０２０１９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,900,000円

研究成果の概要（和文）：「南洋」とは、第2次大戦前・戦中の日本で、現在の東南アジアからオセアニア島嶼部にかけての地域を指して使われた地域名称である。本研究は、次の3点を検討した。１）戦前の日本の地理学が、現在の東南アジア、台湾を含む「南洋地域」をどのように表象していたか。２）戦後日本の地理学における当該地域の研究は、１）からどのように連続または断絶したか。３）かつてから日本と関わり合いの深い東南アジア・台湾・オセアニア等を対象とする現代の地域研究は、上記のような日本の伝統、欧米のポストコロニアル的「熱帯地理学」批判をふまえ、どのように新たな展開をしていけばよいのか。

研究成果の概要（英文）："Nanyo” (South Sea /Nanyang) is the geographical name which was used in and before Second World War in Japan, indicating to the region from the present Southeast Asia to the Oceania Islands. The study examined the following three points. 1) How did the prewar Japanese geography represent Nanyo including present Southeast Asia and Taiwan? 2) How did postwar Japanese geographies continue or discontinue from prewar geography? 3) How can we bring fresh vision to contemporary regional geographies on ex-Nanyo region based on the genealogy of Japanese geography as well as the postcolonial criticism to "tropical geography" in Anglosphere geography?

研究分野：人文地理学

キーワード：南洋　東南アジア　オセアニア　地政学　地理教育

１．研究開始当初の背景

「南洋」とは，第 2 次大戦前・戦中の日本で，現在の東南アジアからオセアニア島嶼部にかけての地域を指して使われた地域名称である．「南洋」の地域概念の普及には，地理学者が深く関わった．人々に「南洋」という言葉が知れ渡るようになったのは，志賀重昂の『南洋時事』(1887 年)に負うところが大きい．それ以後，地理学者は「南洋」に関する地誌書を数多く出版してきた．そして，南進論の台頭以降，「南洋」は大東亜共栄圏の部分地域として，地政学的研究の重要な対象地域となった．

地理学文献目録（人文地理学会編）によれば，1992 年から 2006 年にかけて東アジアとともに東南アジアを対象とする文献数は大きく増加している．日本の地理学は，再び「南洋」地域への関わりを強めているのである．こうした中，「南洋地理学」の歴史を回顧し，そこに内在した問題点を明確にしておくことは，現在および今後の当該地域の研究にとって重要であると考える．

２．研究の目的

今後のアジア・オセアニア地域研究をすすめていくための課題を整理し，問題点を克服するための新しい方法論を検討する．

３．研究の方法

次の 3 点の課題を追及する．

１）「南洋」の地域概念の成立とその変容の検討．

２）戦前の日本の地理学が，現在の東南アジア，台湾を含む「南洋地域」をどのように表象していたか．そして，戦後日本の地理学における当該地域の研究は，そこから，どのように連続または断絶したか．

３）東南アジア・台湾・オセアニア等を対象とする現代の地域研究は，上記のような日本の伝統，欧米のポストコロニアル的「熱帯地理学」批判をふまえ，どのように新たな展開をしていけばよいのか．

４．研究成果

研究成果は多岐にわたるので，ここでは上記の課題１についての成果の一部を掲げる．

＜「南洋」概念の成立とその変容＞

志賀重昂は 1886(明治 19)年，海軍の練習艦「筑波」に便乗する機会を得て，カロリン諸島，ニューギニア，オーストラリア，ニュージーランド，フィージーやハワイの島々などを約 10 か月間で見て回り，その見聞をもとに翌年『南洋時事』を刊行した．

『南洋時事』は，「東洋」対「西洋」という当時の日本社会の地域概念に，「南洋」という新たな地域概念を提示した．志賀は，西洋諸国に侵略・植民地化されつつある太平洋諸島の様子を示すことによって，日本がそのような目にあわず独立を確保する方策を考えるため，一方で近い将来，日本が経済の面で雄飛すべき地域として「南洋」を提示した(矢野 1974；清水 1991)．

『南洋時事』の刊行以降，「南洋」の語が流布するようになった．朝日新聞データベースによれば，新聞記事の見出しの中に「南洋」という言葉を含む件数は，1880 年代の 10 件から 1890 年代には 104 件へと増加した（朝日新聞東京本社朝刊本紙）．記事には，「南洋貿易」「南洋の冒険（探検）」「南洋殖民」「南洋物産」といった言葉が見られた．

最初は漠然と日本の南方の，太平洋の島々を含む一帯を指していた「南洋」という地域概念に変化が生ずるようになったきっかけは，第一次世界大戦である．1914 年にヨーロッパで第一次世界大戦が始まると，日本は日英同盟を理由に参戦し，戦闘行為をほとんどせずに，当時ドイツ領だった南洋諸島を占領した．1919 年のパリ講和会議は，敗戦国であるドイツの植民地を国際連盟の委任統治領という名のもとに戦勝国で分割することを決め，日本政府の強い主張により，南洋諸島の統治権は日本に与えられた．

日本政府は 1922 年，南洋諸島を統治するための民政機関としてパラオに南洋庁を設置した．注目すべきはパラオの地理的位置である．パラオは南洋諸島の西端に位置する．パラオの西には，現在「東南アジア」と呼ばれている地域が広がる．パラオは，南洋諸島と東南アジアを合わせた地域のほぼ中央に位置する．将来的に東南アジアを勢力圏に含めたいという日本政府の願いが読み取れる．

この南洋庁の設置は，南洋という地域概念の空間的拡大をもたらした．それまでの南洋，すなわち南洋諸島は「内南洋」，東南アジアはその外側にあるということで「外南洋」と呼ばれるようになった．

南洋の地域概念の空間的拡大は，地理学者にも浸透した．例えば，山崎直方が，日本軍の南洋諸島占領後に著した『我が南洋』(1916 年）の「南洋」は南洋諸島のことであったが，雑誌「地理教育」第 4 巻(1927 年)に連載された記事「南洋における支那人の発展」の「南洋」は主として東南アジアを指していた．

時代がくだり太平洋戦争が近づくにつれ，南洋の地域概念はさらに変質した．1940 年，近衛文麿内閣が「大東亜共栄圏」構想を掲げると，南洋は大東亜共栄圏を構成する一つの部分地域として認識され，地域としての一体性が唱えられるようになった．例えば，1941 年発刊の国松久弥著『新南洋地誌』は，南洋の統一性を強調して，「今日南洋と言われている地方はアジヤ大陸の東南部の一部とその東南方海上の多数の島々の総称である．一見その間に統一性はないかの如くであるが，併し実際はさうではない．」と述べて，その根拠を三つ挙げた．第一に気候であり，「高温で，多雨，しかも一年中気温の変化が少なく，夏季に雨の多いのが南洋に共通な気候上の特色である」．第二に地帯構造と地形上の

統一性であり，「南洋の地域は大陸部と島嶼部に分かれてはゐるが，かつてはこの両者は連続した陸塊をなしてゐた」とした．そして第三に，住民の民族上の統一性であり，「南洋の主なる住民はマレー族と印度支那族であるが，この両者は体質上も，文化上も割合に類似している」と述べた．

さらに，南洋は「日・満・支」すなわち東アジアとの一体性も強調されるようになった．「日本人の地理的認識における東アジアの拡張は，同時に，地理的認識からの「南洋」の欠落を意味する」(Fukushima 1997)．志賀重昂が唱えた，「東洋」とも「西洋」とも異なる独自な地域としての「南洋」からの大きな変質であった．

＜台湾と南洋＞

台湾の南進政策における重要性は，地理的に大東亜共栄圏の中心に位置すること，日本と南洋との中間地点にあることにある．つまり台湾は，大東亜共栄圏の「南北交通通信並びに物資交流の要衝として欠くべからざる存在」（台湾総督府外事部，1943，p.14）であった．また文化的には，「皇国錬成」の結果として社会的にも「相当程度皇国文化の浸潤」を達成している台湾は，日本と南方地域との文化交流の中心としての役割を担った．さらに南方地域に対する日本語の普及，医療事業，情報宣伝事業などについても，すでに経験を有する台湾は，その模範とされ，台湾に結成された関係諸団体が南方各地に進出していった．

＜出稼ぎ者たちの南洋＞

南洋へのまなざしは地理学者のみが独占してきたわけではない．南洋を直接経験した出稼ぎ者ないし移民のまなざしがある．「地理」の要諦は人間による，生活の再生産のために周辺の自然や人文事象の実用的な空間的知識を得ることと，そうした多様な事物や事象を統一的に理解しようとする観念上の空間認識にある．地理学者は後者の作業をもっぱら行うのであるが，その素材としてはフィールドワークを通じた前者の情報取集を前提にしなければならない．こうした在地の住民の生活感覚への注視は戦後の地理学における重要な動向の一つであるが，明治期以来の出稼ぎ者による実践的な空間的知識はそうした意味で最もリアルな日本人による南洋（観）を示す素材となり，戦前・戦後の「南洋」の比較検討のための見逃せない側面ではなかろうか．この小文のタイトルに，複数の「南洋」を掲げた理由はそこにある．

戦後における南洋との関わりは，とくに海洋環境にあって，戦前の出稼ぎ者の有する実践的な身体化された南洋が大きな意味を持った．当時の当人たちの残した記録やインタビューによると，確かに「一等国民」・「紀元二千六百年」などの「皇国観に裏打ちされた国体思想」とともに，「黒ん坊」，「土人」，「蛮地」・「蛮人」の表現が見られる．明治期以来のオピニオンリーダーたちの南洋観は「国体思想」を基盤とした教育勅語の筆写や宮城遥拝の教育を通じて，日本の市井の人びとにも共有されていたといえる．しかし，実践的な南洋の海の経験（空間的知識）には，「国体思想」は関与してこない．

ここではとくに，戦前の南洋における主要な出稼ぎ漁業であったオーストラリア北部海域や外南洋，アラフラ海での真珠貝採取漁業，時期的に同時並行した蘭領東インドネシアでの南洋真珠養殖，ボルネオ北東部をはじめ蘭印や内南洋でのカツオ・マグロ漁を取り上げよう．

まず，明治期以来のオーストラリア北部および蘭印への出稼ぎあるいは戦前のパラオを基地としたアラフラ海での真珠貝採取漁業は，戦後のマッカサーラインの完全撤廃後，いち早く再開された．戦前の旧南洋興開発水産部門（1939 年南洋拓殖に吸収）の日本真珠株式会社をはじめ関連会社や政府関係者の主だった者たちが当該政府との交渉を進め，1953 年から日本本土の和歌山県串本を基地としてアラフラ海へ出漁したのである．真珠貝船 25 隻による母船式の操業であったが，その従事者の過半は和歌山県南部の既経験者であった．そこでは，戦前の内南洋パラオを基地としたアラフラ海出漁の実績だけでなく，明治以来オーストラリア北部海域への真珠貝採取漁業出稼ぎ者の 8 割が和歌山県南部出身者であり，しかもその操業には海面下 15～30 メートル，ときにはそれ以上の水深におよぶ潜水，海底地質（砂質・岩礁・サンゴ礁），藻場に左右されるシロチョウガイの生息地の識別，潜水病の回避（操業水深に応じた潜水病対策のため浮上速度や中間水深での浮上休止，あるいは潜水夫個人の潜水病に対する体質への配慮など），船上テンダーと潜水夫との意思の疎通，さらには海上・海中における潮流や風向に対応した船体や帆の操船技術など，漁業のなかでも身体化された特異な南洋の海洋環境に関する空間的知識と身体運動が要求されたからである（松本 2016）．

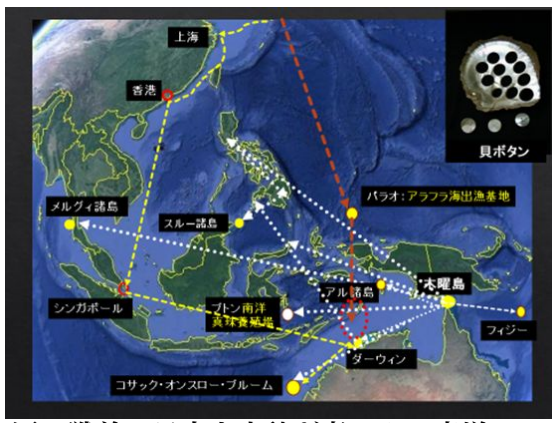

図　戦前の日本人出稼ぎ者による南洋での真珠貝採取漁業の展開

真珠貝採取漁業はプラスチックボタンの開発にともなって 1960 年代半ばに衰退するが，真珠貝採取漁業と並行して，1953 年のビルマ（ミャンマー）・メルギィ諸島，オーストラリア北部熱帯海域である西オーストラリア・クリベイ（1956 年），クインズランド州・金曜島（1960 年），オーストラリア北部準州・ポートエシントン，それにインドネシアおよびフィリピンの海域（1963 年）で展開された南洋真珠養殖にしても，二国間交渉や資本提携では，政府や企業家たちが推し進めたが，その現場での技術者としては，戦前の外南洋セレベス（スラウェシ）・ブトン諸島と内南洋パラオ諸島での南洋養殖経験者たちが不可欠の存在であった．

真珠養殖は養殖筏の設置場所ごとに異なる海域の環境条件や水温・塩分濃度の超微細な変化，漁場に対応した貝抑制および養殖水深の調整期間など海洋環境の見極めを持たなければならないし，また貝の外套膜を使うピース貝の選択や核入れ技術の巧稚が貝の斃死や真珠の最終的な出来栄えを左右する．さらにその技術は「教えられるよりも，盗め」といった徒弟制的なあり方を示しており，手作業の「職人技」が要求される．それゆえ，戦後の南洋真珠技術者や養殖海洋環境の予備調査の第一世代には，シロチョウガイの海洋環境への敏感な反応ゆえに，機械化・マニュアル化・標準化されることのない，戦前のブトンならびにパラオといった南洋での身体化された生態的知識と海洋経験が必須であった．それと並んで，南洋真珠養殖には当時母貝採取が不可欠であり，それにはこれまた戦前の木曜島やブルーム，あるいは蘭印アルー諸島を基地とした主に和歌山県南部の真珠貝採取漁業の潜水夫たち（出稼ぎ者）が従事した．母貝採取の操業は真珠貝採取漁業で述べたように大いに環境依存的であり，それへの適応はそれこそ身体知として組み込まれていなければならない．それゆえ，真珠養殖の漁場環境の理解や核入れにしても真珠貝採取の潜水夫にしても３年以上の訓練が必要であり，南洋の実践的な海洋空間に関する知識はほとんど記録に残されることもなく，実践的な経験知として継承されたのである．

さらにまた，カツオ漁にしても，1960 年ボルネオ北東部のシアミル島（日本企業），1970 年代に入るとアメリカの信託統治領となった旧内南洋ではアメリカ資本によるパラオ・トラック・ポナペと並び，日本とアメリカの資本の下でパプア・ニューギニア本土やニューアイルランド島およびソロモン諸島で開始されるが，これらの漁場での従事者はいずれも，戦前のボルネオのシアミル島はじめ蘭印の外南洋の海域や内南洋のコロール（マラカル島）やトラック諸島を中心としたカツオ漁経験者であった．その従事者たちの多くは沖縄県宮古諸島の伊良部島佐良浜や池間島の漁師たちである（若林 2000 ；宮内 2004；仲間 2012）．海上での鳥やクジラ，流木などの漂流物に付く「ナムラないしナブラ（カツオ・マグロの群れ）」の発見，回遊路の熟知，ナブラへの接近，活餌撒布の方向やタイミングなどの一本釣り技術もさることながら，何よりも出漁に適したタイミングでの活餌の捕獲がカツオ漁の成否を決める生命線である．追込み網を利用する技術は戦前から沖縄の海で培われ，戦前の南洋におけるカツオ漁の従事者は沖縄出身者が９割を占めた．そもそも，外南洋は言うに及ばず内南洋におけるカツオ漁も，当初南洋興発が焼津の出漁者とともに開始したが，活餌確保に苦慮し，元々サンゴ礁地形での漁場環境の類似性ゆえに活餌採捕の技術に長けた沖縄からのカツオ漁従事者とカツオ節製造女工を導入することにより，軍の需要と並んで「南洋節」と呼ばれる興隆をみたのであった．戦後の真珠貝採取漁業や南洋真珠養殖用の母貝採取と同様に，カツオ漁にあっては，地元の組合が日本やアメリカの企業と契約し，沖縄から戦後の南洋の各地に船と乗組員を載せて出漁したのであった．このように，戦前の南洋で築かれた出稼ぎ者たちの海洋環境の実践的な身体化された空間的知識と経験は戦後に引き継がれ，今日に至るまで多くの技術改良を加えながら，インドネシアにおける南洋真珠養殖やソロモン諸島におけるカツオ漁のように，その後継者たちや現地企業の従事者たちへと継承されているのである．

こうしたミクロな実践的経験に根ざした南洋は限られた側面であり，一般性を持つものではないかもしれないが，在地のリアルな地理的知識の一端を示すものであり，南洋の特性を描く上で，彼らの身体性をともなった在地での実践的な空間認識とその技能はもっとも場所の実質性をもった「南洋」を捉える素材であり，考察すべき対象ではなかろうか．

参考文献：省略

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

①池口明子(2018)：河川生態系への環境適用．佐藤廉也・宮澤仁編『現代人文地理学』放送大学教育振興会，査読有，pp.124-139．
②池口明子(2018)：海辺の環境と資源利用．佐藤廉也・宮澤仁編『現代人文地理学』放送大学教育振興会，査読無，pp.106-123．
③Basurto,X, Yokoyama,T. and Ikuguchi,A. (2017): Tsunami is coming!: Local fishers played an important role in keeping rural coastal economies alive after the worst tsunami in Japan's history. Samudra report，査読無，76，pp.4-7．
④岡本耕平(2017)：ハザードマップと参加型

GIS．若林芳樹ほか編『参加型GISの理論と応用－みんなで作り・使う地理空間情報』古今書院，査読無，pp.97-102．
⑤池口明子(2017)：先住民マッピング．若林芳樹ほか編『参加型 GIS の理論と応用－みんなで作り・使う地理空間情報』古今書院，査読無，pp.82-90．
⑥池口明子(2016)：人間の営みを学際的に探る－貝類採集からみる干潟の漁撈文化．秋道智彌・赤坂憲雄編『人間の営みを探る』玉川大学出版部，査読無，pp.188-201．
⑦松本博之(2016)：海域研究への道．村井吉教・内海愛子・飯笹佐代子編『海境を 越える人びと－真珠とナマコとアラフラ海』，コモンズ，査読無，pp.292-306．
⑧松本博之(2016)：コラム「真珠貝漁業の住と食」．村井吉教・内海愛子・飯笹佐代子編『海境を 越える人びと－真珠とナマコとアラフラ海』，コモンズ，査読無，pp.214-219．
⑨松本博之(2016)：波間に消える真珠貝漁業．村井吉教・内海愛子・飯笹佐代子編『海境を 越える人びと－真珠とナマコとアラフラ海』，コモンズ，査読無，pp.186-213．
⑩高木彰彦(2015)：書架『アホウドリを追った日本人：一攫千金の夢と南洋進出』(平岡昭利著)．地理，査読無，60(5)，p.90．
⑪岡本耕平(2015)：堀川先生の卒業論文．堀川侃先生追悼文集編集委員会編『堀川侃先生追悼文集』名古屋大学地理学教室，査読無，pp.78-84．
⑫高木彰彦(2014)：書架『＜群島＞の歴史社会学－小笠原諸島・硫黄島，日本・アメリカ，そして太平洋世界』(石原俊著)．地理，査読無，59，p.91．
⑬池口明子(2014)：エコ・ナマズからみた湿地の政治生態．経済地理学年報，査読有，60，pp.264-286．

〔学会発表〕(計6件)
①Yeh, C. “Geographical Education and its impact on Colonial Taiwan and Korea”, The 33rd International Geographical Congress (2016 年 08 月 24 日，China National Convention Center, Beijing)
②Takagi, A. “New Dynamics of Border Region in Asia: A Case of Ishigaki Island in Japan”, International Forum on Frontiers of Political Geography: IGU Commission on Political Geography, Pre-Conference in Gaungzhou (2016 年 08 月 19 日，中山大学)
③Okamoto, K. “Land Use Changes in Suburban Farming Villages in Monsoon Asia”, International Geographical Union Regional Conference, Moscow (2015 年 08 月 20 日，Lomonosov Moscow State University)
④Takagi, A. “Exceptionalism in Japanese Geopolitics”,International Geographical Union Regional Conference, Moscow (2015 年 08 月 19 日，Lomonosov Moscow State University)
⑤池口明子「エコ・ナマズからみた湿地の政治生態」経済地理学会大会招待講演（2014 年 05 月 24 日，名古屋大学）
⑥ Takagi, A. “Japanese Wartime Geopolitics and Exceptionalism in the Post War Era”,International Geographical Union Regional Conference, Cracow (2014 年 08 月 21 日，Jagiellonian University)

〔図書〕(計8件)
①熊谷圭知(2017)：『移動・開発・場所とフィールドワーク－パプアニューギニアの動態地誌』博士学位申請論文（九州大学文学部），400p．
②松本博之ほか編(2017)：『藤田健児スケッチブック－西濠州・コサック追想（大正 14 年－昭和 13 年)』出版社なし，139p．
③秋山元秀・小野有五・熊谷圭知編(2017)：『アジア・オセアニア・極Ⅰ（世界地名大事典第１巻)』朝倉書店，1248p．
④秋山元秀・小野有五・熊谷圭知編(2017)：『アジア・オセアニア・極Ⅱ（世界地名大事典第２巻)』朝倉書店，1208p．
⑤松本博之(2016)：『木曜島真珠貝漁業の記録－瀧本庄太郎日記』出版社なし，349p．
⑥池口明子・佐藤廉也編著(2014)：『身体と生存の文化生態』海青社，372p．
⑦フリント著・高木彰彦編訳(2014)：『現代地政学－グローバル時代の新しいアプローチ』原書房，375p．
⑧Yokoyama, S., Okamoto, K., Takenaka, C., Hirota, I. (2014): Integrated Studies of Social and Natural Environmental Transition in Laos. Springer, 160p.

６．研究組織
(1)研究代表者
岡本 耕平 (OKAMOTO, Kohei)
名古屋大学· 大学院環境学研究科· 教授
研究者番号: 90201988
(2)研究分担者
池口 明子（IKEGUCHI Akiko）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：20387905
熊谷 圭知（KUMAGAI Keichi）
お茶の水女子大学・文教育学部・教授
研究者番号：80153344
高木彰彦（TAKAGI Akihiko）
九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授
研究者番号：90197054
葉せいい（YEH Chienwei）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：30242332
(4)研究協力者
松本 博之（MATSUMOTO hiroyuki）
奈良女子大学・文学部・名誉教授